

## 短期派遣 EUROPA 派遣報告書

氏名：カン・ミンギョン

派遣先：国立ドイツ語研究所 (Institut für Deutsche Sprache: IDS)

派遣期間：2011年3月10日～2012年1月20日

研究テーマ：ドイツ語における使役的事象の表現形式

### 派遣の概要：

派遣先であるドイツ語研究所 (IDS) は、現代ドイツ語研究の中心的な役割を担っている大学外研究機関の一つで、所内図書館は膨大な所蔵資料に加え、研究に必要な様々なサービスが完備されており、研究滞在にはこれ以上ない快適な環境である。外国人研究者のための受け入れ体制も非常に良く整っており、図書館は常に様々な国からの研究者で賑わっている。筆者も図書館内に指定席を与えられ、語彙部門長であるエンゲルベルク先生のご指導のもと、ドイツ語における使役的事象の表現形式に関する研究を行った。

使役とは CAUSE (…を引き起こす) + BECOME (…になる) および CAUSE (…を引き起こす) + DO (…する) の関係で捉えられる意味概念で、使役的事象には大まかに言って (何らかの働きかけ・原因の結果として生じる) 対象の状態変化および人の行為の引き起こしが含まれる。またこれらの使役的事象を表わす言語形式には、動詞による語彙的手段の他に、使役助動詞や機能動詞構造などによる統語的手段があり、本研究は、事柄の意味特性と表現形式との相互関係を明らかにしつつ、ドイツ語の使役表現の全体像を描き出すことを目的としている。

このような認識のもと、派遣期間中は、状態変化の語彙化分析を中心に研究を進めてきた。「状態変化」という出来事がドイツ語動詞においてどのように語彙化されているのか、またそれらの動詞がどのように用いられているのかを、動詞の使役的用法と非使役的用法の形成可能性に関わる「使役起動交替 (Kausativ-inchoative Alternation)」という統語的現象を軸とした分析である。状態変化動詞に見られる使役交替現象は、統語論と意味論のインタフェースに関連して、古くから注目されてきたが、今なお多くの研究者の間で議論が続いており、学術誌でも時々特集が組まれるほど、ホットなテーマのひとつである。しかし、ほとんどの議論は英語を中心に展開され、ドイツ語に関しては、まだ十分な研究成果が出されていない。また、理論的・類型論的研究がほとんどで、関連動詞を網羅的に取り上げ、実際の使用の実態も踏まえて分析した研究が待たれているところである。そこで筆者は、博士論文の内容をベースに、データを見直しつつ、まず未解決のまま残されている問題点を明らかにすること、そしてそれらの問題に対し理論的な研究で抜け落ちている事例も含めて分析・考察し、言語使用の観点からの知見を提示することを目標に研究を進めてきた。現在その成果を論文の形にまとめているところである。

派遣期間中は自分の研究に取り組むほかに、研究所で開催された各種研究会、ワークショップ、プロジェクト会議等に参加する機会も多く、幅広く様々な研究テーマに触れることができた。また、研究所やゲストハウスで出会った様々な国からの研究者たちとの交流は、研究の面で良い刺激になっただけでなく、研究所と宿舎の往復という単調になりがちな日常生活にアクセントを加えてくれ、行動範囲を広げるきっかけにもなった。ドイツ語学を専攻していながらも、(日本がすでに留学先であったこともあり)大学院を修了するまでドイツ長期留学の機会を持てなかった私だったが、今回このような形で約10ヶ月間の滞在ができたことは、研究や語学力のレベルアップのみならず、日常生活のなかでの色々な経験も含めて、今後ドイツ語研究・教育に携わっていく上で大きな財産となった。

今後の課題：

最優先課題は、上記の執筆中の論文をなるべく早く完成させ、国際誌に投稿することである。関連テーマとして同時に分析を進めている「状態変化動詞+4格目的語+方向の前置詞句」の項構造パターンに関しても、近い将来、論文の形で公表していきたいと考えている。また、形式的な観点から言えば lassen 使役構文と使役を表わす機能動詞結合の分析、意味的な観点から言えば人への働きかけを表わす使役表現の分析が、次のステップとしてある。それぞれ先行研究も多く、私自身もこれまで部分的には扱ってきたテーマであるが、それらを使役表現全体の意味と表現形式としてどのようにまとめられるかが、今後の課題として残されている。さらに、派遣生活を通じて、非母語話者としてドイツ語学を研究する意義について考えさせられることも多く、対照言語学への関心も以前に増して大きくなったような気がする。今後は、日本語や韓国語との対照も視野に入れ、積極的に研究対象を広げていきたいと考えている。その一つ目の目標は、日本語や韓国語の使役表現をそれぞれ概観し、両者の相違を踏まえたうえで(日本語と韓国語は文法的に非常に類似点の多い言語として知られているが、使役に関しては相違点が多い)、ドイツ語における使役表現との対照を試みることである。そこでは、まず「使役」の意味概念とその範囲について再考の必要がかもしれない。

最後に、ずっと憧れの留学先であった IDS での研究滞在という貴重な機会を与えてくださり、支援して下さった、成田節先生をはじめ、短期派遣 EUROPA 関係者のみなさまに、この場を借りて改めて感謝の意を表したい。また、快く研究指導を引き受けて下さったエンゲルベルク先生をはじめ、IDS の先生方、研究員および図書館の職員のみなさま、そして図書館でたくさん時間を共有した仲間たちに心からの御礼を申し上げる。